KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

ル 3
1214
2

巻二

東海道

全五冊

二

箱根　三島　沼津　原
吉原　蒲原　由比　興津
江尻
小夜の中山の古歌　四丁目
三河の国の杜若　八丁目
不盡山の景　十二丁目
宮の宿　十五丁目
岩代の松の発句　由井　十六丁目
富士の浦海士女の言葉　十八丁目
清見が寺の碑　品川

ルロ3
1214
2

内閣文庫
内ル 3
1214
巻 7

擬略之巻二

東は明石より小田原と有り左は小田原陣乃河秀吉卿
御本陣は石垣山也男山は北は山根より深き谷有り通道を見て
何方へも通路御ほん風也わきとて早川あり人山を引まと
早川村より豆刈浦海へ乃海道あり先年高き樂海
へ向うしろ乃浦迄と云わとるて石橋山人皇八十代之倉
院御宇治暦四年八月三日頼朝卿大庭と合戦あしかく
道は傍より真間与市義忠乃石塔あり根深河は御川関也

順化文庫藏書

付和川沢より右の方世尊寺と称し根府河石を色なる土肥表
露の橋あり侍りし。○板橋地蔵堂あり
右の方に山を風祭と云塔の沢より流れ出る川を橋二ヶ所
渡る付橋所の右の廻り付く塔の沢なり通る。湯元
右より早雲寺毛利小泉早雲寺もるべし代わらへ
枝の木立物ぬりて彩色し枝折りの中に風呂あり
きうりとも高紙せんかとき沢
柱をやとの乃さうれのもしうち

男中て打うつと云所に表孫三郎とも云れうつ右方
乃やうより関えい風也されいとそいはへ小野小所と云女そと云
又字おそ迎寄あり也と云鶏鳴返しいにあり下あり
ぬ風祭なりと云男芋て風也御房八和所ゑ若人なるへし
後宮殿らくく乃迎い彼樂山より行く西行乃造地より長海
あてはやて二人ゑ小腹とうくくよれ。とくくを沢。大沢
○細付所乃芋尾ゑ三くり休むそれなりきいら沢しわり
ちうさうしくれうくんをのとをこう孫やま

あぐまはこうはるむさくさん寺

と云の事と也とさしてを上り坂いりふ幸多也○かし味

坂猿をくまとも澎湃て○白水坂右乃方ふ二子山諸ふ行ふ

箱根山ゟ後撰集ゟ箱根のふさみ山ゆきゝたり○え箱

根○さいゝ河ふ毛い箱根れ山ゟ地獄わるもと云なゝさいゝ河

ふをゝ右の方ふ権現へ行道わり先年ゟ伊豆ゟ住ゝ

てふ寺落をし対武人ゟ当社ハ人皇四十六代孝謙

天皇乃御字天平寶字年中萬巻上人草創と地伝

擇て三所権現乃松壇麓ゟ文人皇八十五代後堀川院

乃御治世安貞二年箱根山神乃社壇佛閣焼亡當社ハ

端月上人草創後五百余歳面禄乃例ふ小条武義ゟ

兼時澤ゟ歩さて造営ゟ十二月二十八日遷宮本

社ゟ度火出見尊也駒形権現白和龍王右鵲王九

鵲王及客人宮ゟ後行者吉備大臣弘法大師並ニ天

師等ハ舊法わり伊豆箱根ハ三所権現ゟ相模ふの

号歩ましくさら曽我十郎祐成五郎時宗ハ右乃真

かれ物とも一決せしうたゝくしくたちぬるハ忘れる社侍
々今剱王院東福寺と沙汰せし。御関所二人ゝ
笠ぬぎ膝とかゝ先御番所よりまゝ乗ておりて通る
箱根驛小田原うら品川御殿ゐ町ゐ町ゐ相引ゐ
孫ゐ橋あり。ゐくし町ゐ所とおてたゝ大橋ゐ入る
ゐ橋近年焼て焼乃ゐれ付るとゐ風也富士ゐ煙ゐ絶
てえゐゝぬゐ乃煙ゐてゐ事ゐ和ゐまゐちゐさくゐて
ゐるハ沖乃小橋と云ゐ所ゐ有ゐ也ゐ事ゐ庚申塚

満岳乃浦

ゐまゐゐ沖乃小橋ゐ紙ゐ乃中
紙ゐ一ゐ代ゐゐゐ八重ゐ橋風
とゐ風迎ゐれゐゐ也小橋ゐ和ゐ也ゐ和ゐ橋ゐ和のゐものハ初橋
と云ゐ鎌倉右大臣

ゐゐゐ橋と我紙ゐ紙ゐ伊豆乃海や
沖ゐ小橋ゐ一ゐ和ゐ乃ゐ紙
色ハ白の初橋ゐ今ゐ白橋の橋ゐ乃ゐ橋ゐ和ゐ

将ハ肥前丸に至るまで行わり綱経に斉へし
大将かしこまりし早舟なれ
まやくも人にわひそしぬ
とわりもまた丹後守の門侍を手にいれそて統紮
と要ひかしに舟人こと将をうけとる所に将とひしわか
し召を世に多むをかみてひと為坂をとる○山中に渕
予山猿ハ井くも若しくそ茶屋に立よる体から風也夕
ア小田原陣乃わるましハ語つるとも氏か遊乃事をやさ決

此所ハ小田原より五里余三方ハ要害かし堀二重を掘径
乃難所の方を追手と定む此口なり山海道まて三十町
計城よりかれぶ迄ハ谷と山々か家ひさ自由也
後詰を韮山より差出此城主ハ松田右兵衛大夫康秀か家
老左衛門尉氏勝間宮豊前守好高朝倉能登守景澄舎
弾正朗連池田民部輝弘山中大炊助正季椎津隼人行憲
間宮式部好則同源四郎好宗同将監好孝佐藤左衛門
則忠栗本備前盛文山下兵庫正勝山中源三正友山岡左

京家則汗山大膳治師富田豊後守政朔等捕籠ル為
ス近江中納言豊臣秀次堀尾帯刀吉晴秀次中村式部少輔一
氏一柳伊豆守等也然ラハ天正十八年二月廿九日小田原ヨリ
山上郷左馬将軍大物入ヲシテ五十騎計ニ成テ来ル
等ヲ相ヲカヽヘテ入来叶ヒ成ル様ニ後ヨリ小田原ヘ引
返ヲヽ中村式部一氏ハ陣ヲ入ル敵様ヲ成ル
中村ヲ次ヽ云者一番ニ家ヲ討ヲ後ヲ動ス数間
近ヲヽ続テ家入ル其時徒軍哨ヽ家込ヒ時一柳

豆ヲ討死ヲ今ヲ下番ヲヽ云ヲ石垣ヲ切様ヲ度ヲ小田原
ヲ落行ヲヽ第ヲヽ追ヲヽ成ル方ヲ道ヲ
也ヲ垂山ヲ道ヲヽ成ル地中ヲヽ本垂山ハ也ヲヽ三里
ヲヽ成ヲヽ討垂山ヲ味ヲ度ヲ小原ヲ長原ヲ氏ヲ状ヲ田野動ヲ
中原ヲ徒ヲ負ヲ神布川ヲ帝ヲ徒ヲ恵ヲ統ヲ小原ヲ志ヲ帝ヲ氏ヲ盛
廣瀬ヲ孫ヲ為ヲ重ヲ小野寺ヲ云ヲ帝ヲ貞ヲ孫ヲ小ヲ原ヲ十ヲ帝ヲ
為ヲ長ヲ治ヲ横井ヲ弦ヲ前ヲ支ヲ盛ヲ大ヲ石ヲ田ヲ方ヲ動ヲ定ヲ弦ヲ石ヲ巻ヲ二ヲ九
帝ヲ康ヲ景ヲ等ヲ術ヲ義ヲ子ヲ寧ヲ山ヲ尾ヲ張ヲ四ヲ大ヲ石ヲ信ヲ雄ヲ蜂ヲ次ヲ賀ヲ河

彼方宗政福島左衛門左衛尉正則細川越中守忠興蒲生飛騨
守氏郷中川藤兵衛秀政森右近太夫忠政戸田氏鉄尾藤氏
繁生為雅毛利近世系附但る寺忠弘筒井伊賀守定政等
押しをせり○番原山所より一柳乃石塔あり長坂下長坂の大明
神の三川原○神吉の原深田

三嶋驛鵜根より三里半八町代官中貞享乙丑八年霜月
十日焼亡其打しを見烈しく家屋敷しを別宮神社社
しをく中冬上石上人中御屋敷中稲荷

を稱る神社三所ありしを

わらはとやらしを西乃神社大宮

さ[illegible]ホしを[illegible]めしを来しを

とを古記分かくおよび男山神社

天満河苗代[illegible]

わまくらもん神社ハ

とようしをや風地河内

伊勢守貫堀早鑑と申家しを雑間法師今乃所

天満宮と云是也は伊勢と力とをいまとなして天地とう
とかぶ事和歌の徳とする橋の下部三橋の社伊勢国紙
智郡大山祇神の社伊勢国賀茂郡三嶋の社の三所共一神也
と云聖武天皇の御宇天平五年三嶋明神現ぜと云當社
本地大通智勝佛也孝霊天皇の神の化身と云伊勢の
宮儀律宮賛岐の一宮文は武神乃御子也伊予国河野氏
八幡宮の姓也通の字と賓名は用ゐる武神乃ゐる
と申也○千貫櫓豆引張河の流れ○伏見○長沢○橋村

右小八幡宮わるの社所に御対面ありと云所の義四年
新田の義義貞挙兵ひし御九郎義経奥列ち来て対面
ありしと云○黄瀬河橋の黄八社所驛あるべし
もとの右乃方ち見物の通わりいつ人箱根路延宝
元年海上ちとうの東海道の方と云ものとして行れ下
見物の国より行く河上大磯と云所ち桃園山宝福寺と云
寺小連奇の宗通宗祖法師乃墓自畫自賛乃像あり
うたしわくら我ゆかぬ世のうつ紙

まつねはされそうしやまぞねふ

又發句

世をよぬるはさらに志ら露の盛かな

此花は昔世にありし名人の此所にて白拍子と云ものの庵
と結ひの跡よりまかりしとなん見捨て村なる人に見せる
見回る角やまもて

石丸んちやまさ川の山の木の本のかるから

うらよの月と見てそめる哉

とよみし歌にて見ても昔をがくし風
来りしたのしみにて見てあり○三枚橋むかし家とは東に
近く云所の入口右の方に山王の森あり此内に大釜一つを積
胡麻富士の巻狩の時炊釜と云ふ是は狩野河水上登りよ
り流ると此河岸中に釜の渕と云ふ所あり○河曲輪此川向
ふ香貫と云所に霊山寺とて禅寺あり小松内大臣重盛
卿の石塔あり肥後守貞能平家都落の後西国より重盛の
遺骨を持て首よりして来東国にありしを此地に葬りて納め

佐々先○戸倉村古城あり栗田刑部氏政の家臣三宗彩六郎秀範是小長谷左衛門尉の嫡子小海と云

詞花集

よ[illegible]の海をへよせよせ海つら

いゆ[illegible]とものゝ浦[illegible]ひぬ

[illegible]

沼津驛三宿より三里半武帝より紙[illegible]名あり古城あり[illegible]乃佐々[illegible]

[illegible]と云人[illegible]と云風[illegible]城[illegible]永禄元亀元

比甲刑乃山縣三郎兵衛昌景[illegible]天正八年武田勝

頼[illegible]

[illegible]松平周防守康重小田原滅亡乃後中村長太郎一家

[illegible]長六年大久保次右衛忠佐洋代同十八年忠佐入[illegible]

道[illegible]病死[illegible]

也八沼津乃宿[illegible]方[illegible]

[illegible]と云長州乃[illegible]

足浜とハ和田乃松原ともいふ

みなとの浦くに波のうへ哉

とゝろ〳〵天正乃比武田勝頼公義乃妨なりしに此松原

とゝろ拂ひ今ハそれなりに成よまつ原松なるへし此図

氏代御家の石塔あり云風説なれとも決ふまんよしなり

へむ〳〵小栗宗印時政手繦乃息氏代御前と号して

東国へ乃ぼり給河豚を味はしとて浜の味もしとて

清河文覚上人流罪なる命を勅なり長谷氏代御

前迷ひ入て漁舟多古浦乃弟ゆへ味〳〵なりて其

隙わり○名門村○浜村○松原村○今浜村右八方山際

とんて風地指とそ一名さゝ浦山ゝ真垂寺社

古跡也若八南西ハ太平今川氏乃持城ゝ〳〵元亀の

ゝ甲列の宛山梅京乃家臣保坂掃部云者居ゝ

国乗陣ハ浜中村武部乃浦氏垂と賜て家人川毛越左衛

つと云者と垂ゝ慶長六年天野三郎兵衛康景

御領と拾ゝ国十二年丁未三月九日渠ゝ家人同氏乗

田村乃卿人と教を代官井お志女見と祈康京兆尼ホ
ちて改易後破邦せしホ
原驛沼津ちを星市浮橋う東と今ハ東と云ホ
ちえ吉東れ色ちて八浮橋う東ホ
ホ
ちつ乃沼津ちめ往めうさ沼ホ
ちれ志ちホと塔てこのま年
と色八代所ちて色や風也安てやそれたしう真別ホ

城張浮橋と云東れホ加と芦く伝後宗極掘函反
ホ乃実塔紙形東云
ホ往ち當東乃ホ男仏ホ八ホ廉
ホ乃ホ御ちい東ホ彼ホちう東れ塔う東れ色ちて色や風也
中く乃ホれ色掘ホ明神ホ乃ホ
背色掘明神反入唐ちく三と色ちて帰ちと塔ホちの沼
内後宮新ちホく肥ホホ沼ちて居沼ホ明神反ホ

立腹あて我ハ三とせ乃君夫國ゝ出てそれゝ年と
称てもさめてもれゝ独人ハやうゝ歩せれとゝ人さう紙
ゆかゝてあさは我と地ゆひ給ゝ〇ハこて寝所ゝゝ
なゝ給ふさあうよゝゝゝ死人ゝ家年ハいやゝていとあ
御門紙と追出とと云男守てそれハ也ゆてハ又それゝ
似さるやうなゝ年ハ鼻國ゝ秋胡と云ものゝ妻とゝ
ひゝく五月月小宿小付て陳別ゝ行五年ゝて故郷ゝ
帰る道家近ゝ成ゝる所ゝ女桑伐つゝて居

ゝ秋胡車ゝ下ゝて女ゝ向ゝく桑とつゝて世後添ゝむ
ゝゝハ我ゝ陪人と云女迎年一せ次秋胡重て我ハ金と多
持ゝ我ゝゝ陪ゝくゝゝせむと云女我ハ支と持使出ゝ
帰る後又姑ゝ桑後ゝて養ゝ今ゝく金ゝ命ゝゝ別と云
秋胡力なゝく家ゝ帰る母ゝゝゝ彼妻ゝとゝひゝて妻の
ゝゝく乃ゝ人ゝ桑とゝゝ女ゝゝ秋胡面目ゝて
ゝゝ後赤ゝく恥ゝ妻婦母ゝ向ゝく家業秋胡ゝ云
事ゝゝ所乃ゝ人ゝ非ゝ義ゝ支と持

すハやなりつゝある書ともひとゝ法人数々ニさひ文八結ま
しとて出る海く後云ふ乃ま云ふ云ふ吉おてを赤乃
測よ弟と和泉さう先乃明神辰と書別乃せんさく
なりと云風也それを良女とやゝさむ男和ニの乃わし
たゝ山もゝ山と同時よりとかゝ赤つゝめ風也わまは赤
平地なりゝ小延暦廿一年三月雲霧晴冥なる津
十月廿九日法山とたる見神乃造る山と云後よ赤来
きるれよや彩山く云ニの赤頂上と浦ゝ嘗と云男守て

浦ゝ浦乃氏とゝくを足さゝ風也ニの赤嶽東の
方芝山赤嘗ゝ毛鷹明神乃禿倉あると見ゝ山宮
と名付く本社々例津れ辰ゝ赤と云野る見明神
乃神る九十九延ゝて百延よ見ゝ法と赤れ赤云也○一本松
風也云ふハ右れ方ニ赤山乃葉よ井おと云ふ所わゝ
云ふ大泉寺とて右弘わゝ見ハ彩和泉の御分河野
禅師乃住ゝ法名法花院と名ゝん云
赤ニのゝと阿野れ辰と云赤西乃方と測津れ辰

と云ふ所にて八幡の宮の毛八人望八十九代亀山院
の御宇文永の比より冷泉中將藤原朝臣隆茂
と云ふ人造立せしを大往ちらしく代出れ今は
度度焼亡武田小条の世に今は衰上にて今八僅
に社頭わらはれとも毎年八月十五日神事相撲
を行絶なしゆきうけ絶りぬ○相原山富士の麓
東西へはるくとありよ法わら布をくるくるよ
うわらを小松年さして賤が世わらはとあるとて

裳を波にひきて幌とうさ屋にそいてくわまれ
かこれ茅屋よ入くたはす体ふ男富士山と法く
くとたくいふ茅屋乃わるく反覆ふ去と紀茅屋
初めなるふ言ふ白くたる法山ふ雪と紀と海る形を
やわるく絵よ雪乃かき附とたとの万葉集よ
物乃秋て海れくる雪はみな月ふ
りふけぬ逸そ乃夜わらはく
とく高ふ人を海るうなとくたての風逸さこそあら

然武文よりの不盡山しく半つゝ時雪尽されたりて又立又
中將為家くらゐ時五月晦日より此やまとゝん落ひてか
のこまくらに雪ふりかゝりよりこゝ落ふもの

時しらぬ山かとこゝ次の月もすゑ
雪ゆゑや富士の根をわけ出ん

另雪て榜す為の歌

ふつ振捨てもれぬひまあるはこゝ
年をくる富士の山ゝ雪

西行法師もこゝの煙を詠てとゝ
詠りしまいよ八月ゝとゝくゝ風也此山麓
武天皇の御宇延暦十九年四月十四日ゝ
同十八日ゝ清和天皇の御治世貞観六年五月十日
計あり頃の氏ゝ煙ゝ立八煙時ゝ火光天を
照ゝ山上ゝ盤石崩落て海を埋む事三十里はか
り初八滅る方ゝ稀ゝ甲州の方ゝ移ゝ
後ゝ稀ゝ事ゝ古今の序ゝ富士の山ゝ煙

さらに貫之も書給ふ近き比誰人か詩あり

碧天雪白白雲間　忽卒児童又仰顔
東海始遊多少客　冨山敢不問何山

當山ハ三国ニ並ひ双ふ名山伊豆甲斐駿河三ヶ国ニ跨り
なかくにも駿河なりとハいふなるをもつて正
面なりとす人皇六代孝安天皇九十二年六月はじめて此山出現
すと神ならぬ書院ニなひき其形ちくかと雲霞て色と見えけれ
ハ其のときより穀の集まりてこれを穀聚山と名付く

後ニハ名をよせて冨士山と云山なれ腰より下ハ諸木
生て中ほどより上ハ白砂山となれ攀ぢ登るものゝ肩ニ中
途まてゆく頂上より登る道半なし役行者此頂ニ
のほる毛を始として今なれ世ニ至て毎年六月ハ参詣
優婆塞とるりの数を尽し深き衣を着て砂を
と云所より上へハ移る代浄るともしつきる松明ハ只方
燈のこしき峯を八葉と云蓮華と合せるに似たり頂
上ニハ大なる穴有内院と名付く貞観五年の秋白衣

乃神女出現し給ひ宰相殿に対面し給ひ寿元
を尋ねて決定御子と云延喜二十四年小流る大明
神祇と申珠天皇大同元年社殿建て祭る右之
中に牛乃宮と云秀倉わら女人ら此所もて来
牛乃宮の縁にて今と牛淳宮と云牛乃
と云宮殿にて菅原と出る在方に乃御子小
初わら風也宮所謂ひさきて此ー天男時後
行ち牛乃宮ハ此ら人也ハ此ら風也此行ち

八人皇四十二世文武天皇乃御時乃人也役小角と云
大和国葛上郡ゆて生る三十二歳の時葛木山岩
穴に入て三十年藤葛と衣とし松菓と食ひて神呪
を持て入る人ら雲に乗り飛行仙術を弘傳し葛味と金峯山
乃間に石橋をかけ一言主の神良醜夜叉仏
を半分に行ち怒て此神と縛る右行ち
石橋乃東ら渡り人ら
わら乗ひしき乃の神

同年寛二年五月初命より伊豆の大橋より流れ出て
西へ走る富士山より海上とをつゝ山伝上に寄来る
者ども迷ひ乱れ行者何そて自由に流れ
しも風地震母と生捕もて力なく和に應ずと云男
湯とをつゝ嫌に勅に任せ和に行者にて死亡
汗自立ち神方さへ母とをつゝ徒て力なし御るか世に
戯乱みて国と失ひ家滅ぼす身と滅亡す不孝
の罪ども起消已らんよりまさとける道よりこの勅祖

父の半とをつゝ起て一子勅に入くれとくの也朋友
を通ひもとをつゝ武ハ心よひ也武ハ名よりまひ名已う
やうして身と滅とたてゝ滅しを半之○大野新田
○今井村立と元吉家と云橋を此所也て風地此河下
と三俣と云の所公ハ名をクニ俣の者大蛇
仕て生贄と俵へ〳〵く男ハ彼上方ち姫をつまて
来て下ハ者姫と生贄より也後角より移ぞし
久後ハ雲一村起来て姫をそ行しと云半ち風

也それを生贄に訓み通して式人をかたどられ儀るハ上代の
事かなるよりて総四下河名左右のもち神女六人あるを
云下女一人つゝて弟約人宮ゝ上所ゝて此宮ゝ
ゝ所乃ゝひめゝ猿名女止宮ゝそれを見と捕
て生贄よ為ゝ所ゝ其時よ宮ゝ彼神女其時よ宮ゝ合わせハ
其内一人拐て儀ひとく云下女乃わゝ云宮ゝ此人ゝ
宮よ所神女ゝ乃ゝ紙を八我ホ上方よりて子細と
ゝ上ゝく宮者ゝ乃ゝ来ひそれまて八待て宮ゝ

それて和ゝ者よ流云して夜伏見ようひく池ゝ何
とゝ宮ゝ乃ゝ人ゝ獻聞よ達一不使乃事也此ゝ乃ゝ所と
持て美と張筋よ添て測よ流ひ一自今以後生贄ハ
ゝ人ゝ宮ゝ宮肯ゝ乃ゝ者帰ゝ其通よ行ひ六人
乃神女神ホと奏と見ゝ生贄ハやゝねゝ神女此
ゝ歩ゝて居ゝよ死ゝそれを為て此神女と云先
柏原よ也一禿倉也柏原ゝ乃ゝ別よ社ゝ建て而乃
氏神よ為ゝ乃ゝ神と云ゝや近代ハ見ゝ乾ゝ

わゝ乃伊法と云ハ乃保寿寺ゝ毎年六月廿八日ハ三
保ゝて生贄乃施餓鬼と執行ひ行るゝゝそ実乃ひて
ゝ元とゝて右京の入ゝゝ右京法寺門殿乃道ゝ
今ハ此所と今泉と云

右京驛原ゝ三里ゝ宿初ハ毛ゝ東南ゝ
延宝庚申閏八月六日大風乃時ゝ湖入ゝ赤屋流出
人ゝ多ゝ溺ゝて死ゝ天和二戌乃ゝ此地ゝ
ゝ乃て体ゝ伊乃男毛ゝ富士河ゝて何程ゝ

ゝ里ゝはゝゝ此ゝ変化ゝゝ此男神ゝ伊乃義四年
源平對陣乃所ゝ風地ゝて真通ゝて右京湖
伊乃後保元乃ゝ実ゝ乃ゝ福原ゝ公卿
て大將軍ハ小松權亮維盛副將軍ハ薩摩ゝ忠
度侍大將ハ上総伊忠清ゝ先ゝて真勢三万餘騎
九月二十日都ゝ出て東国ゝ赴ゝ十月十六日富士河
乃ゝ国ゝ行ゝ清水ゝ次乃軍兵附副て七万餘騎先陣
ハ蒲原富士河ゝ進ゝ後陣ハ千絋宇津谷ゝ支ゝ

彩色遠景と云て是柄山より紙市瀬河より三浦人の見物
信濃乃源氏池殿の家人浮海乃家にて勢揃をしよ
武十万騎と云乃人間世四月卯刻富士河を渡平
矢合と定けるに信乃家世三日乃夜半に富士の沼
へいく程もなる水を何ぞ驚きん一度に
ぶつと立る羽音乃雷大風かとのやうに聞
平家の軍兵共あるや源氏乃勢向ふ方へ
ぬけもとくハけまして物をも通くさて

旅とさして通らまし平忠乃程にそれ
ゆ高とおて右の山せを久保の原と云是より浅間の
社の六所乃宮と云六ケ所より小河を長者乃谷山の
神人勧び風也ゆ家礼と見ゆりし五月三日流鏑馬
わり村ゆ氏系図と設むる事かとわるしくいよ
○うるひの宮渡ゆ氏の大宮浅間乃河を洗ふ浦おゆ
平塚天皇御建立ゆ浅間ハ是をうるひのれ上
より瀧ゆと云所わり鞍石りさかりて山乃上より嶺

又茂る白浪ハいせ見はこれ々り雪となるゝかゝ此所乃下は
凡夫河と云上方より冨士参詣の道者ここにて垢離
をとり精進を退て國よりいるゝを云る風也御師房は
そのわたりまでも見送ぬ中にて彼大宮浅間より程
乃山家までも見侍りし日蓮宗の冨士五ケ寺と云
寺白糸の瀧のまゝに云所をもれまひの外広き寺也
○本門寺石乃方より松林茶の交と云小祠毎年五月
初旬半の流鏑馬あり○松岡村風也云事ハ是より

石の方ひとつ人家大様ある宿家と云屋ある曽我兄
弟の丸倉の八幡と号するも今も欲をはかりなる形て
ありしゐて云其並ひと久沢と云福泉寺と云ありた
兄弟の石塔苔むして文字も見えさる位牌より十郎
祐成ハ高岸院殿峯巖良雪大禅定門五郎時宗
ハ鷹岳院殿士山良冨大居士と有此処を鷹乃岳といふ
五郎此ところにして首洗乃首かけ松なと云あり
建久四年五月廿八日の夜曽我十郎祐成同五郎時

宗冨士野の河狩の旅館井かれ屋形より推来し
文武敬工義度射祐河と対刹直吾の侍祐成河家の
たゆよ或は付且一或々疵と蒙る祐茶仁田四郎忠常
り付且時宗八河所の五郎丸より牛鞭が軽和反
毒よ細と字石寛宥の河んとくへも祐経の嫡
子頼よ和田とよら祐経り殊せう家ひきよ尾西が
の家之祐成の墓よ第所とてうこて死らと云
其きと大わらしこ云やの冨士河よ刹家右れ公際

小岩ケ貫桐寺尺程る水神れ森巖上よ松柏さ
つ風也苔八代河の筋宮ひ或々河れ岩ケれ下へ流き
或々わ宮ひ校流し成て水神れ森河の中流ら
牛ら宮ひ杉へ其河ら人水鏡と家宗ら民猫
牛はうらのあ代長尾と弁れ巖ようさ付しら
乃ら河のこく小筋さ宮ひ清ら乃河代尼れ内まう落
ゆ不ん者ら式袋堤しら号
朔日さ沢ら代乃と雪ら帰し

さて坂よりねんの大河こそ
と家隆もよみ侍ふ風色藤原基政の哥に
舟よりとりあげの河とは日ごろ
聞ずや行しうさ侍る事
此波しの茅屋もちかくなりて
ものこと酒を肴にして波しの行こと成けり
秋の比朝鮮人来朝の時此河より船にて
ひ夕頼巷の筆をあらはせる名所なる大河なり

もとより海道第一の長流と聞よりあて
波高く波しまちくとおして半とさし櫓をはげしく
漕とはいへども人々用ひまし渡るに半もしハさる事
なかしこれをさハ河原に地をしてかく中ひの岸沿て
屏風をたてしごとくしたる信列八ッ流をかく
甲列より見て登ること早川あと蔵のごく大
河とたちはかり舟より乗とさ世人ちなや白のそこ法

○岩淵右の方へ行き甲州身延山へ参道の方なり
富士山のわたりより見れば風色えんなる
やうなる事なり富士まで松明にて出て
見るべく方くの数とりたてなひなり
後夏右矢より内まはり富士参り
とやけの今のやうなる者なり
てい知り今朝四ツ三候の生贄を使へ大蛇
こもり出て祭れんとて行。中の郷村色よ

つ富士河内の西の方なり傍うを過乃色て一月より
家より紅風京なり
蒲原驛吉原より三里但し河乃海一傍遠く
見近附より宿本入口右の方御殿山古墳之風色あ
り小田原より小原彩之郡箱根を守将なり
特野彩八郡義忠清水上野級正今笠原彩六郡秀
範多賀周防守長宗甚川豊前守国信加藤
孫十二年巳巳十二月六月武田信玄押寄世清水吉田

たゝ近く西宣の公市亟物麻侍遠笛一書の塚の
京迄て小栗方報軍 討死給る藤塚しらけ色の
須磨田子の浦と云男和へ

田子の浦 なたそこそ人あらふ袋なすこ紙
うちして極うひ見こねん人生さん
ゆ武所の奇くや風色それはさりこ拾遺集より五おく
見い紙中四多拾浦くこれ武うこ山色赤人
たこの浦うち出こゆみ色ハ白おれ

しらゆきの雪ハ降ける
又紙衣と云人
奥津風 吹こむよわまや田子浦の
わるよれりーや火燒ましらん
色こそ南面の雪ひこ○ひうこ○小ぐ○せこ泥衣
あて平包と松ろして赤り休むわまた浦須ゝ
しー桶と荷ひ潮と波わるこ海老こ衣ぬまるう
こるふいつ平なるこ赤ゝらと新乃こくみこてい

れうしかりきたる風也一とせ中国より新次磨に
海を通りしに後生より紅わう無人よりとくわきあん
行平と云家令乃人毎にわきより行平に御ちわう
と云しきよなきに紅をるへしとくとくに永こそらて笑
ひ給ふ後より般上ゆてハ給より乃ことうて御殿しきし先
縁ハれうしきを物といふ男角あさうに常行平はうう
あもあるに芳わる卿相渡色より道遥志給ふあまの人あ
まく塩焼くむ其中よりしに法十七八ちうに和ま宴新

うにてうしをうてけきハ彼云卿ひまもひ呼しに撰て紫に
小袖をとらしせたへる彼女
紫に雲乃うるに紅を何うをん
かうをうをうをうをうまよをん牙あきハ
とうをうて小袖をくへしに行ふ云卿いとくにうきを紙なとん
具して行ひくをしくハ老ふ母に引をてくハやうあ
まく
法なうりわうらしに物紙をあちう

いそ雲井ゝうゑの浦ゝ
とゝうゝゝなれあれなれひて毋りゝるゝつゝ
て紅よゝゝ書ゝなしけるゝ云

△由比驛神奈ゝ町ゝゝ道ゝ河原ゝ田比河ゝ云
○寺尾　○藏沢　ゝゝゝ蓮山ゝかゝ谷ハ下ゝ孫ゝ
通行不ゝゝゝゝゝゝゝゝ新ゝゝゝゝゝ云ゝ明暦ゝゝ秋上ハ
山ゝ道ゝ付ゝゝゝゝ山ゝゝ作ゝ八幡平ゝ云ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ起ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ風也ゝゝゝ付ゝ比藏薩

壇山ゝ影向ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
古塚ゝゝ八幡ゝゝ川ゝ怪ゝ并ゝ撥ゝゝ掬篭
信ゝ八通ゝ責ゝゝゝゝ場ゝゝゝゝゝゝゝゝ
塚ゝ敗ゝゝ奥津ゝ河ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
洞ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
云ゝ男ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とのゝ山あらしよ神師の浦をわたる風也心底神師
の浦ハ出雲國の名所なれとも名所を多き物ゆへ奥ゆかし
惣してれかしやうなる名を多き物ゆへ奥ゆかし
と云名所和泉の国にもあり
若狭れのひかたの川の濱うり田露なん
さつ孫をまとわりとこたく
と爰ハ忠房ゆうゝ侍ゆへハ和泉の名所山わられ濱と
ゆゝれ濱と云家隆

わゝ侍て今ハらわゝの名所撰
いくせんはのトおらちか年
と
孫ゝれの山ゆゝれ濱れ川とり
藻ゝ侍ゆへ
と俊頼ゆうゝ侍ゆへ集
いゝれ山ゆゝれ
ゆゝれ濱ゆ我ゝれ

ゆく

駒ゐたせ磐城なる山より日ちくまぬ
人もおわしれ流てかもゝ舟ん

と云所もわもハ磐城山ハ今城ちゝ山ゆて
もわんゝ。奥州河ちゝ流る

奥州驛由井ちゝ二里ゑ名清見ゝ実名ゝ
那仲ハ所ゑ

あもとかちゝ乃ちゝ和ゑ雲ゆて

ちゝ乃ちゝ実ゝ也ゝ所ゑ月新
所乃内右ハ方ゑ清見寺巨鰲山求玉院と云ハ寺ハ
五山内恵日山東福寺乃介長老聖一国師ハ弟子
関聖と云僧清見寺と建ハ男風て三井寺の風ゑ
ゆゝ流ゆて清ゆゝの流ゆゝ也ゝ守ゑもゝとわもハさゑ
そゝゝ紀寺なちゝ風也聖一国師と中ハ人皇
八十七代後嵯峨院ハ御宇寛元寶治乃ゆゝ人ゑ
八百二三十年ゆゝ成ゆゝ山寺ハ西の方ゑ長者

屋敷と云不申彼之井寺和女住居る所と云伝わる

よとゝゝ河原と云所もわるく

いか原やとゝゝ河原は孫まゝ

ゝくゝわれくわゝ浦の邪

ゝて山の山○鳴ゝら河○唐原河岸波

江尻驛真津ゝゝ里武所風也ゝ男も草刈

少行ゝゝ代宿ゝ通りぬわゝしおて物ゝゝ志りる

ゝ男南下乃古塚八者ゝれ人ゝ居住ひ作わゝ

慶應義塾

ゝれゝ甲州乃山縣ゝ郡ゝ柴原ゝ拓らもて ゝ長後宛

山梅雪原甲陽は海以後破却と沙汰乃ひい

羅路之記卷二終